

## 「スウェーデンの呪縛」 客員研究員 新井 光雄\*

「呪縛」を岩波国語辞典でひくと「まじないをかけて動けないようにすること」とあり、それでは、と新潮国語辞典を見ると「まじないをかけて動けないようにすること」とあった。全く同じ。一文字の違いもない。こんなこともあるのだとちょっと驚くとともにその理由を知りたくもなったが、本題とは違う。ここでは「まじない」と「動けない」ということの確認。これをエネルギー問題、なかで原子力に関わっての状況がそういえるのではないか、ということである。

日本の原子力は世界が一応のところで「原子カルネッサンス」の方向に動きつつあるのに停滞感を免れないでいる。膠着状態といってもいいかもしれない。辞典にある「動けない」状態に近いと思える。

そんなところにその縛りを多少とも緩めるようなニュースが入ってきた。スウェーデンの新しい原子力に関わっての動きだ。そう。あの国民投票で脱原子力を決めたスウェーデンが原子力再開に方針転換したという。原子力反対派には悪いニュースだろうが、推進の立場にはいうところの朗報だろう。

なぜならば「スウェーデンの呪縛」とでもいうことがあったからである。スウェーデンが国民投票で脱原子力を決めたのは1980年のことだ。もう30年も前のことになる。原子力世界にとっては掛け値なしに衝撃だった。それはそうだ。アメリカのスリーマイルアイランド原子力事故を受けて、その影響がひたひたと広がるなかで、国民が原子力に投票でノーを示したのだ。北欧の小国とはいっても「国民投票の選択」という結果は重大な意味を持つ。重かった。

個人的な体験のなかでもやっかいな面がここから発生する。「呪縛」の誕生だった。反対の立場の人たちにとっては「偉大なる選択」となるので、「呪」は失礼かもしれないのだが、原子力を必要とする立場からすると、議論の場などで、このケースを拠り所にされると事情の違いなどと反論するものの、なかなか説得が難しくなり、窮地に立たされてしまう。国民投票はドイツ、イタリアなどに広がっていく。反対の人には強いよすがとなっていく。必要とする立場の一種の劣勢感は免れない。少しオーバーかもしれないが、日本国内の原子力に関連しての自治体選挙、あるいは住民投票にも底辺で影響していたという捉え方もできるのではないかと思えてくるほどであった。「スウェーデンの呪縛」という位置づけはそうオーバーでもない。さまざまな場で「スウェーデンでは・・・」が語られて、反論という図式が広がる。

1997年の新潟県・旧巻町で行われた原子力立地についての日本初の住民投票では、反対派が勝利して、小型スウェーデン版ともまでもてはやされてくる。実際にはスウェーデンの脱原発計画は国内供給力との関係もあり到底順調とはいえないのだが、象徴の意味は重く、こうした現実の説得力をもつことがないままに今に至ってしまったということになる。やはり「呪縛」の表現はそうは間違っていない。言葉の金縛りとでも言った方が妥当かもしれないが。

\* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

いずれにしてもスウェーデン政府は従来方針の転換を宣言した。これに関連しての法案は議会承認が必要だが、すでに国民は世論調査などで原子力支持になってきており大きな障害はないとされる。政府などの発表によるとこの理由は約束の2010年までに現在の10基廃炉は非現実的であり、代替エネルギーの確保ができない。さらに温室効果ガスを削減する目標達成が原子力抜きにはあり得ないなどがあげられている。多少の解釈を加えて言えば、「エネルギーの安全保障」と「環境優先」を前提に「原子力」の役割が明確にされたということにほかならない。

スウェーデンは12基あった原子力発電のうち、これまで二基を廃炉したに止まる。当然スウェーデンの電力は約半分が原子力で賄われている。脱原子力を選択はしたものの現実的な選択ではなかったことがここに来てはっきりと露呈したということなのだ。

そこでようやく政府宣言で明確になったということで多少遅すぎという批判さえあるようである。いずれにしても、これでイタリアの方針転換に続いての「呪縛」からの開放。イタリアも近く具体策を出すことになっているとされており、今後の「呪縛」の関心はドイツに向かう。

脱原発路線はスウェーデンがひき、ドイツが牽引したというおもむきであり、この秋に行われる総選挙が大きなカギとなる。メルケル首相は「脱原子力は失敗」とまで明言しているものの、選挙公約とはしていない。連立政権の選挙の難しさがある。

慎重な意見はアメリカのオバマ政権の原子力政策が明確ではなく、前政権よりの後退を懸念する。これも説得力を持つ。安易な楽観はできるわけではないのは確かだが、世界的には巨視的にみて原子力問題は動き出したとして決定的な間違いとはならないのではないだろうか。

こうした流れから日本の状況を見ると、「呪縛」のなかにはまったままに見える。何が原因、つまり「呪」なのか、必ずしも明確ではないところが日本的。はっきりした、誰にでも理解できるような議論にすらなっていない。どこかで頭の、はやりの言葉で言えば「チェンジ」しないと取り残されてしまう。

「スウェーデンの呪縛」はなくなった。その新しい選択にあやかりたいところだ。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)